「あぁ…」

目覚めの気分はあまりよくない。起きていても、寝ていてもどこにいても夢の中にいるようなどこか現実感のない感覚。

――そう、入院生活をしていた頃に似ている。少しイヤな記憶を思い出して、私は大きくため息をついた。

「どうしたの加蓮」

「ん？ちょっと目覚めが悪いだけ」

私、北条加蓮はブランケットから身を起こすと、凛の横に干しておいたブラウスを羽織って最低限の身だしなみだけ整える。

「凛、そこのポーチ取って」

「はい」

「ありがと」

こんなときは少し頭をスッキリさせたい。

――でも外出するならネイルだけは忘れたくない。ちゃんとお手入れして、塗って…それが、私のルーチンだ。

「よし、と……ならちょっとコーヒー買いに行ってくるわ。自販機どこだっけ」

「部屋出て左の扉抜けると渡り廊下に転移するから、そこを進んで第三レッスン室に飛んで用具室の扉を抜けた先が喫煙室前で自販機、かな」
「おっけー、んじゃ」
「うん。気を付けて」

ふたなりサキュバス。そんなふざけた存在に私たちが急に作り替えられたのはもうだいぶ前のようにも、2’3 週間前にも感じる。
この前台車を押して物売りにやってきたつかさと留美さんの話によると、『外とは位相が違う』らしくて現実世界での時間はほとんど経過してないらしい。でも私たちはこの異空間に飲み込まれてワープゾーンだらけの迷宮と化した会社から脱出できていない。

「んひぅぅぅ、イく、こんなの耐えられるかぁぁぁぁ!?ひぁぁぁぁぁぁぁ!」
「は、はは……はははは!もうダメになってしまったようですなぁ!さあ、屈服してもらいますぞ夏樹ぃ!」

いまだに慣れない空間転移の感覚をこらえて進んだ渡り廊下を抜けようとすると、下からすごい嬌声が響いて来る。思わず階下を覗き込むと、亜季と夏樹が中庭のレンガ道の上で痴態を繰り広げていた。
夏樹を押し倒して乱暴に腰を振る亜季の口からはよだれがダラダラと滴り落ちていて、夏樹の胸の上にかかっている。理性なんか吹っ飛んじゃっているっぽいその下で喘ぐ夏樹も、獣みたいな声をあげていた。

「おおおお、ほおおおお！！！んほおおおおおお！！！！！！」
「ふぉおおお、夏樹マンコたまらんですぞ！わ、私も吸い取られるぅぅぅぅぅ！」
「だ、出すなぁぁぁぁっぁ！今こんなに出されたら、め、メスになるぅぅーーーーーーーーーーーッ！」
「なって、なって！！！私専用のメス穴になるのであります！！！」
「ダメだ、ダメだ…アタシには…アタシにはぁぁぁ！！？？」

夏樹の目は死んでいるわけじゃない。とはいえあの状態から逆転するのは難しそうだけど、なんとかジタバタ動いて体勢を切り返すチャンスを狙っている。
けれども亜季の脚力に阻まれてそれはまったく出来ていない。

「無駄無駄ァ！抵抗は無駄であります！もっとほら！腰を振ることに集中したらどうでありますか！？」
「ふひぁぁぁぁ！？搾られるぅぅぅぅ！全部ぅぅぅぅ！？」

ああなる前の姿を知っているから、正直見続けるのが耐えられなかった。
…私も身を守るためもあって、凛や奈緒とふたなりサキュバスとしての能力を磨きあっているし、こうやって出口を探す中で遭遇した相手と身体を重ねたこともある。でも、その肉欲に飲まれた結果がさっきの二人だ。
――私は、ああはなりたくない。
そんなことを考えながら自販機のある場所に転移した瞬間、懐かしい声に呼び止められた。

「あら…加蓮じゃない」
「奏…」
「なに、どうしたの？そんな驚いたようなカオして」
「あーーーー、いや…なんていうの？」

自販機の横に添えつけられたソファに腰かけていたのは速水奏。私のアイドル仲間で、友人のひとり。でも彼女だって私と同じくふたなりサキュバスになってしまっているはず。だとしたら…

「あら加蓮ったらそんなに警戒しなくて良いのよ。私、いきなりあなたのこと押し倒したりしないわ。それよりどう、ちょっと隣に座らない？」

そう微笑みかけてくる奏は、確かにさっきの亜季や夏樹の様子とは違う。私は覚悟を決めて隣へ腰かけた。

「いやビックリしたぁ…まさかここで奏に会えるだなんて。そっちも無事みたいね」
「こういう状況を無事といえるのか分からないけれど。まあ誰かの精液タンクとかオナホールにはされてないわね」
「あははは…それだけで十分じゃない」

奏からそんな単語がストレートに出てくる時点で、奏もやっぱりふたなりサキュバスの価値観に影響されているのかもしれない。でも確かに発情した様子はないし、いきなり露骨なスキンシップをしてくるようなことはない。

私はそんな戸惑いを心に抱えたまま、奈緒や凛以外の相手とちゃんと話せた喜びからついつい色々話しこんじゃう。

「――――そうだ、コーヒー飲みに来たんだった」
「あ…ならちょっと待って」

立ち上がって自販機にお金を入れようとした私を奏が制する。

「どうしたの？」
「それなら美味しいコーヒーが飲める場所を知っているのだけど。一緒にどうかしら」
「……」

…これは罠かもしれない。
連れていかれた先は私の全然知らない場所で、そこで散々に犯されちゃうなんてこともあり得る。でも

「うん、じゃあお願いしようかな」

私はこの友人を信用することにした。

相手を性的に屈服させ支配することはふたなりサキュバスの行動原理だ。だからこの狂った空間では何日もの間アイドル同士の犯し合いが起きているし、そこから逃れることは無理かもしれない。
けれども速水奏という人間は…美しいものに憧れ、美しくあろうとするこの人間には、そこで卑怯な手を用いることを絶対にしないだろうという確信があった。

「そう？じゃあついてきて」
「うんよろしくー」

そうして彼女についてワープを繰り返すこと数度

「お邪魔するわね」
「いらっしゃいませ」
「おや、ようこそ奏くん、それに加蓮くん」
「あ…千夜にあいさん」

そこは社員食堂だった。
ふだん百人近い人が利用する食堂はどこからか持ってきた暗幕で仕切られていて、食品を提供するカウンターの前には足の高い椅子が並べられて、まるでちょっとした喫茶店みたい。
カウンターの奥にはここの主なんだろう、東郷あいさんが立っていて座席側には白雪千夜。だとするとちとせさんも…

と視線を巡らせると、私たちの死角になる位置で社食の机にコーヒーカップを並べてこちらに手を振っていた。
私は手を振り返すと、千夜の導きに従ってカウンターに腰かけてあいさんと向かい合う。

「ようこそ。別にお代はいらないけれど今は豆がほとんど手に入らなくてね…私がブレンドしたブラックかカフェオレしかないんだが、どうするかい？」
「えっと、じゃあちょっとスッキリしたいんで今日はブラックで…あ、アイスでも大丈夫です？」
「もちろん。奏くんは？」
「それじゃ同じものをお願いします」

しばらくして出されてきたコーヒーをあんまり香りも楽しまないまま一気に口の中に入れる。そうすると冷たさとコーヒーの爽やかな苦みが一気に広がってここ数日頭にかかっていたもやが晴れたような気分になった。
それが心地よくてぐびぐびと飲み進めてしまい、まだ奏が少ししか飲まないうちに飲み干してしまった。

「ほう…どうかなもう一杯」
「あははは…すいません」
「いや構わないよ。一気に飲んでくれるということはキミの口にあったということだからね」

そう笑ったあいさんが離れた瞬間に、なんか力が抜けて思わずぐでーんとカウンターに手を伸ばしちゃう。

「こら、はしたないわよ」
「分かってるわよ…でもなんか疲れちゃって」
「まぁそうよね。こんな状態、頭がぐちゃぐちゃになっちゃうもの」
「でしょお？」

今度は体重を背もたれに預けて頭をぶらぶらと振る。外にいてこんなリラックスするのは本当に久しぶり。奏はその私を苦笑混じりに眺めているけれど、止めるつもりはないらしい。

「いきなり『はいあなたは今からふたなりサキュバスです。これからあなたたちには犯し合いをしてもらいます。そうじゃないと誰かの肉奴隷になっちゃうかもしれません』なんて言われて、そのゲームに乗ること自体がなんかムカつかない？…あ、コーヒーありがとうございます」
「そうね…まずルールだけ押し付けられて知識も何もないわけでしょ。私の場合はここのあいさんとか、楓さんに色々教えてもらったから少しは理解しているけれど。加蓮はどうなの？」
「ワケわかんない内に凛と奈緒に合流できたからさ。まぁその辺から少しずつ情報収集できたけど…正直自分が理性を失わないためにはイき残るしかないってことくらいしか」

それだけ分かっていれば十分すぎるのかもしれないわねと頷きながら、奏はコーヒーを傾ける。カランカランと氷の音が軽妙に響き、輝くルージュとグラスが触れ合った。
――いや、やっぱり色っぽいわ、奏。

ひとつしか離れてないとは思えない仕草を徹底しながらこうして振舞っていることがどれだけ難しいか、私だってなんとなく分かる。

「まあ、犯し合って這い上がれっていうのには正直私も興味が湧かないわ。…犯して屈服させたい相手、ならいるんだけどね」
「へぇ……楓さん？」
「もちろん」

奏が楓さんに執着しているのはみんな知っている。それは一緒にパリで撮影をするために共同生活をして、一緒にユニットを組んでから一層強いものになっていた。
面白いのは、楓さんにもそれに応じるような行動がちょくちょく感じられたところ。そう、まるで奏の対抗心を喜ぶような様子。

「もう挑んだの？」
「まだ。正直、勝負にもならないわ」
「あー、あれ？ロードサキュバスってやつ？」
「そ。私たちみたいな混じりものじゃなくて純正のふたなりサキュバス」
「あららら…本当に厄介な奴だ」
「ほんと、乙女の恋路は険しいわ…」

そうわざとらしくため息をつく奏を見て、私は思わず吹き出しちゃう。そしたら奏もつられて笑い始めて

「はは、あはははは、なにそれ…」
「フフフフっ、ちょっと大げさだったかしら」

なんて笑い合う。そうして少しすると、奏の視線がスッと私に固定された。

「――――だからね…。その前に経験値をたくさん積みたいのよ、私」
「――――犯し合いには興味がないって話じゃなかった？」
「そうしてデスゲームみたいなことをするのは興味がないって言ったのよ」
「最初からそのつもりでここに誘ったの？」
「まさか。でも、加蓮のネイルが綺麗にお手入れされてるのを見たら、それ良いなって思っちゃって」
「え、奏も？」

驚いた。まさか私と同じことを考えてるなんて気があうというか、なんというか。

「ということは加蓮も？」
「うん。奏のリップ、えっちだなって思ってた」

「あら…じゃあ塗ってあげましょうか？」
「やった。私もお返しにネイルお手入れしてあげる」
「そうね。折角なんだからお互いおしゃれしてからやりたいわね」

私たちがそうして視線をぶつけ合っていると、あいさんが覗き込んできて

「奥の部屋、空いているよ。化粧道具も好きに使いたまえ」

その誘いに私たちは迷わず頷き返していた。

暗幕で仕切られただけの空間を部屋と呼ぶのはかなり強引かもしれない。
応接室から引っ張り出してきたらしい横長のソファを二つ並べて固定し、白い生地だけを敷いた『ベッド』の上で、私と奏は互いのリップとネイルの仕上がりを確かめていた。

「うーん、やっぱ奏のリップの仕上がりって抜群ね。きらめきが違うっていうか」
「フフッ、加蓮のネイルも素敵。自分じゃなかなかこうはいかないわ」

「そうね…やっぱり私たち」
「お互いの魅力の出し方が分かってる。でしょ？」

その通りと笑い合う。でもそれってつまり…

「私が奏の指先を良く見てたってコトなのかしら」
「あら？そんなに普段から私に惚れていたの？」
「冗談はよして、それをいうなら私のリップを魅力的に塗ってくれた奏の方こそ惚れてたんじゃない？」

あいさんたちに声が筒抜けな状態で、こんな歯の浮くような言葉を交わすなんて本当にどうにかしてる。でも、今はこの情動に身を任せてしまおう。

「正直に言っちゃいなよ、速水奏。『私の目はあなたにくぎ付けです』って」
「フフフ…結構思い込みが強い方なのね。『加蓮』が『私』に惚れているのよ。これからそれを教えてあげる」
「上等。自分の気持ちに気づかせてあげる」

ふたなりサキュバス同士の戦いはセックスバトル。単純に考えれば私の方が指技に自信があって、奏の方が舌技が優れてる。でもそれがどれくらいの差があるかは実際にセックスをしないと分からない。
――――だから、そそる。リスクに胸が躍る。

おそらく奏もそうなんだろう。私に口づけをしようと近づくその瞳が潤んでいる。

――――さあ来なさい奏。あなたのベーゼを私が受け止めてあげる。

「ん……んんっ!?あ、や、そんな深く…じゅる、んむぅぅぅ?」
「あ～む、ん、ぢゅぢゅ…ふぅ…れろ、ちゅぱ…んんん～」

完全に誤算だった。
まるでキスだけでイかされちゃいそうな感覚。こんなことふたなりサキュバスになってから初めての経験だ。私は本能に突き動かされて奏の背中をかき抱くと、うなじとヒップに両手をはわせて彼女の攻勢を受け止める。

「ぁ…ん…ンン…!」

そのわずかな間だけ奏の舌技が鈍る。
効いている!だったらどちらが上かを教えなきゃいけない。

「んん!?あ、ちょ、ちょっと待って加蓮……」
「だめ、待たない……んちゅ……ぢゅるる、ちゅぷ……」

奏の頭を抱き寄せて、唇を押し付けるようにしてキスを続ける。奏の吐息が熱くて、私の理性も溶けてしまいそうだ。
――このままじゃダメ。もっと強い刺激で彼女を翻弄しなくちゃ……。

「ひゃうんっ!?あ、そ、そこぉ……」
「へぇ、奏ってここが弱いんだ。いい反応するじゃん」

服越しだけど、奏の乳首の位置はすぐに分かった。指先でつまんでコリコリしてあげながら耳元でささやくと、彼女は身をよじりながら喘ぐ。

「加蓮の指使い……すごいわ…ぁぁぁ…」
「まだ始まったばかりだよ?ほら、ほら」
「あ、あああっ、やめ……こすらないで……おねがいぃ」

弱点を見つけた私は執拗に責め立てる。
奏の反応がいちいち可愛らしくて、つい意地悪をしたくなる。

「ねぇ、脱いでよ。直接触りたい」
「あら、積極的なのね?」
「大丈夫、私も脱ぐから」

「……」

奏の返事を待たずに、私は着ていた服を脱ぎ捨てる。そしてブラジャーを外すために背を向けると、奏の手が肩に触れた。

「どうしたの？」
「ふふ、私が外してあげる。こういう時ってなんだかドキドキしない？」
「別に。だって私たち女同士だし」
「もう、そういう意味じゃないんだけど。まぁ良いわ」

そう言いながらも奏は私の背中に手を回すと、ホックをはずしてくれた。そのまま私の身体を支えてくれる。

「ありがと。じゃあさっそく……」
「ええ。来て？」
「もちろん」

奏の乳房に手を伸ばす。
触れた瞬間、私の手の中で柔らかく形を変えるそれを見て興奮が高まっていく。

「んっ……そんなにじっくり触られると恥ずかしいわ」
「だって、奏の弱いトコを探さないと～」

奏が顔を赤くしながら目をつむる。私はその隙に彼女の胸に顔を埋めた。

「んちゅ……れろ……ちゅうぅ」
「あああんっ！？」

吸い付くたびに奏の腰がくねる。
それを逃さず抱きしめると、今度は私の太もものあたりに熱い何かが押し付けられた。

「ふ～ん。やっぱり奏のココって濡れやすいみたいね。それにおちんちんも…」
「そうね…最近どんどん開発されちゃってるわ。けど自分だって同じじゃない？」
「まぁね。正直もうビンビン」
「なら見せて御覧なさいよ」

奏はショーツ一枚の姿になって、私のスカートの中に潜り込んで来る。
股間の辺りに感じる奏の顔。その視線は私のふたなりペニスに向けられているはずだ。

「さて…私の舌のテクニックをもう一度味わってもらおうかしら」
「フッ、やってみなさい。私の方が上だってことを分からせてあげる」
「どうかしらね。もう期待しちゃってふたなりサキュバスの本能刺激されちゃってる匂いがスカートの中でムンムンよ？」
「それは喘ぐ奏がエッチすぎたからよ」
「あら嬉しいことね。じゃあ今度は加蓮にエッチになってもらいましょ」

奏がクスリと笑って、それから私のスカートをおろしてくる。太ももに舌をはわせてから、ゆっくりと足の付け根へと向かっていく。

「んっ……はぁ……ん、んふ……」
「ぁぁ……ふぁぁ……あ、はぁ……」

奏の舌がふたなりペニスに近づいてくるにつれて、私は声を抑えきれなくなる。彼女の吐息がかかるだけで、ビクンと跳ねてしまうほど敏感になっているのだ。
――まずい。この状態で舐められたら……。

「はぁ……はぁ……加蓮……ん、はぁ……」
「ん……はぁ……ぁ……かな、で……」

互いの荒い呼吸だけが響く部屋で、私たちはただひたすら相手の愛撫を受け続ける。
やがて、彼女の舌先が私のモノに触れる。その刹那

「あああああっ!?だ、だめぇ!そんなところ舐めちゃだめ!!」
「ん……んんっ……ちゅぷ……ちゅるるる……」
「あああ!吸わないで!先っぽ、そんなに強くしたら……」
「ちゅぷ……んん……加蓮の、おいしい……」*+

「あ、あ、あ……だめ……だめだめだめ!もう……出ちゃう……!」

限界が近いことを悟った奏が、さらに強く吸い付いてきた。
その快感に抗えず、私は奏の口内に向かって射精してしまう。

「あ……あ……ああっ!イク!イッちゃう!!あああああ!!!」
「ほら、射精しなさい。私のクチに。ん、ぢゅ、ぢゅうう…!」
「あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ!!!!あああああああっっっっっっ!!!!」

私の欲望の奔流が、奏の紅潮した顔を染めてゆく。
その真っ白なソースに指を絡めて口に含むと。

「――――美味しい」
「クッ…射精まではするつもりなかったんだけどなぁ」
「ご愁傷様。私のクチは一度ペニスを含んだら逃がす気はないの」
「ふぅん…じゃあ、試してみる？私の指テクとそっちの舌テク、どっちが気持ちいいか」
「良いの？無様に無駄撃ちしちゃうわよ」

――言ってろ。
私は対抗心をメラメラと燃やしながら奏とシックスナインの体勢で向き合った。

「さてと。じゃあ、奏には私の指使いを堪能してもらおうかな」
「…ッ！細い指がバラバラに絡みついてくる？あ、カリ首を刺激しながら亀頭を…！やぁ！？」
「ふふ、しゃぶり返さないと負けちゃうぞぉ」

その言葉にすぐ奏が私のふたなりペニスを飲み込んでくる。それだけで思わず射精しちゃいそうになるけど、ここは互いに意地の張り合いだ。
私の指が奏からザーメンを吐き出させるのが先か。それとも私が奏の口にザーメンを吐き出すのが先か。これは勝負なのだ。絶対に譲れない戦い。

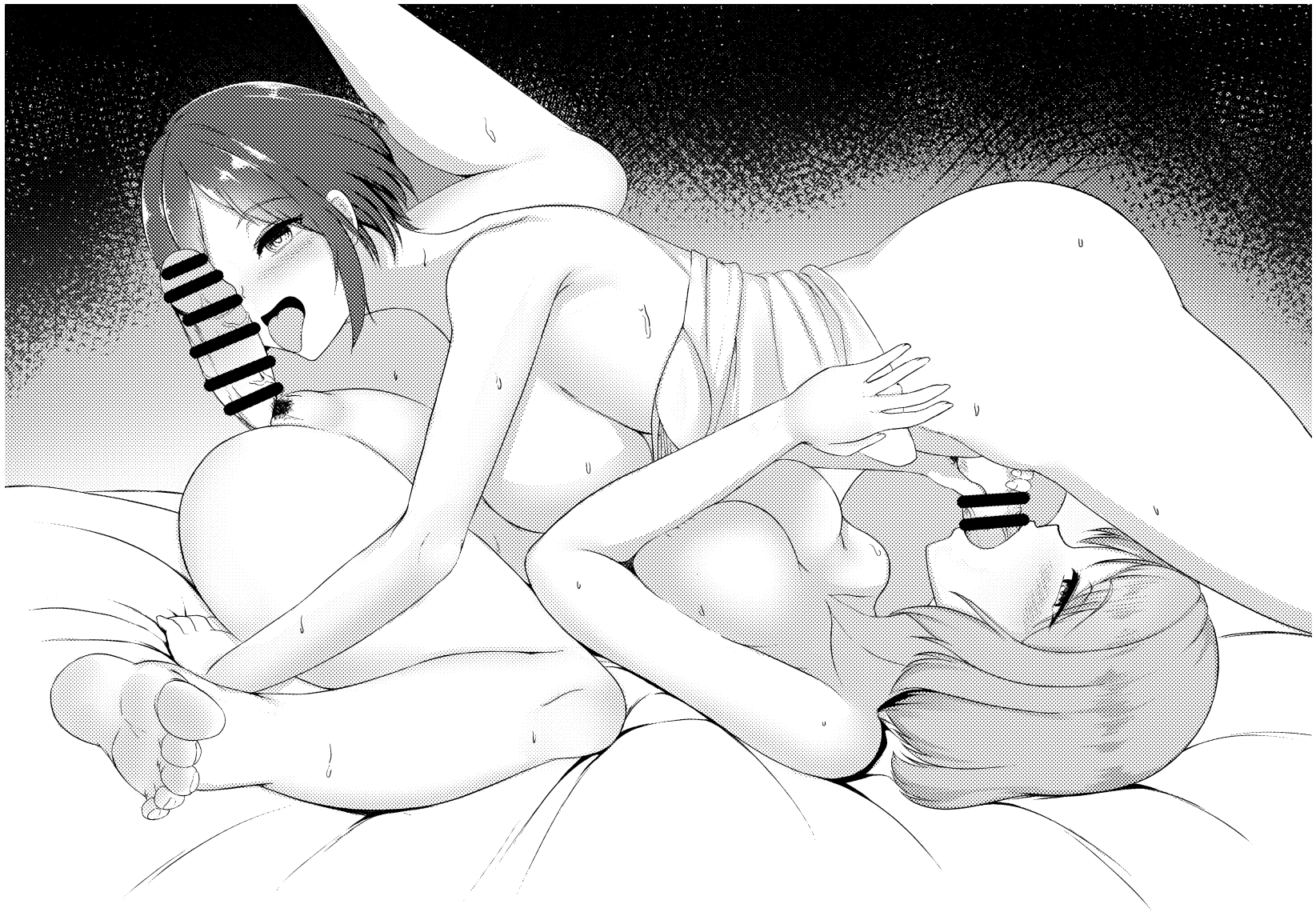
「ふっ……んんっ……んく……んんんんっ！！！」
「ああんっ！？ちょ、ちょっと加蓮……まだまだ！ぢゅぢゅ！あむぅ…！」
「こっちこそ……ほら、もうカウパー出ちゃってるよ！もう無様に射精しちゃうんじゃない？ほらほら！」
「ひぁ、ダメ…クッ…んむぅぅぅ…れろれろ、ん…！」

実はこの戦い、私には勝機があった。だって私には言葉攻めができる。舌だけしか使えない奏よりも、指と言葉が使える私の方が絶対有利だ。
実際、私はもう少し耐えられそうだけど、奏はもう苦しそうだ。

「イく？あんだけ自信満々だったのにイっちゃうの？ほら、イっちゃえ！私の手の中にザーメン出しちゃえ！」
「あ、あ、あ、アッ、アッ、アッ、ダメ！出る、でちゃう！あああああああああ！！！」

奏が絶頂すると同時に、指の中に敗北の証が放たれる。それをすくって舐め取ると、奏が悔しそうに言った。

「加蓮ったら、こんなに激しくしてくるなんて……お行儀悪いわ」
「うふふ、当然でしょ。だってもっと奏の恥ずかしいところを見て、私への想いを自覚してもらわないと」
「さあ、じゃあもう少し加蓮のおちんちんを味わわせてちょうだい？」
「もう一回？まあ良いけど、じゃあ次は私も少しおクチを…」



こんな美味しそうな匂いをぷんぷんさせられたら、私も我慢できるはずがない。指をそえて軽くしごくと、すぐに奏のそれは硬さを取り戻した。
シックスナイン勝負の再開。舌使いの素晴らしい奏に対して、指も使いながらの私も不利とは思わない。

「んん……ちゅぷ……んぐ……んん……んっ……」
「あ……ん……れろれろ……ん……ん……」
「はぁ…んんん…んぷぁ…」
「ちゅ、ぢゅぅぅぅ…あァン…はぁ…れろっ…」

互いの肉棒を舐める水音と吐息だけが響く部屋で、私たちは互いに高めあっていく。
私は奏のものに吸い付くと同時に、指で中身を搾り出すように扱く。
奏は私のそれを舌先でちろちろと舐めたと思えば、すぐに大きく飲み込み、まるで喉の奥まで吸い込まれているよう。
正直互いに一歩も譲らない、という状態だ。
けれどもそれはもうふたりとも一気にイってしまいそう、ということで

（ダメ、こんなの耐えられない、ふぅわぁぁぁぁぁ！？）

そう叫ぶのをなんとかこらえて、自分の口の中で蠢く奏の絶頂の予感に備えた。
そして――――。

「「あ、あ、あ、あ、あ……んぁぁぁぁぁ！！！！！！！」」

ふたりの絶叫がシンクロして響き合う。ぶしゃぁぁぁ、という音を立てて互いの絶頂の証がふたりの顔を汚す。

はぁ、はぁ…と荒い吐息が繰り返され、しばらくして私の口をついて出ていたのは強がりの言葉だった。

「――――――はぁ…はぁ…やっぱり、私の方が、有利じゃないかしら？」

だらだらと汗を流した髪をかき上げて奏を見下ろすと、クールな視線で見つめ返してきた彼女も、私と並ぶように姿勢を起こす。そうして悪戯っぽい笑みを浮かべて

「あら？そんなことを言ってしまうの？じゃあ私も頑張らないといけないわ…ね！」

「え、きゃあ！？」

「それならちょっと強引に…攻めちゃおう、かしら」

ソファの上でパッと身をひるがえすと、奏は私の上に馬乗りになる。

ピタリと私のふたなりペニスを自分のおマンコの位置に照準をあわせて…

「じゃあ――――――食べてしまうから」